

「国宝 阿弥陀堂天井画 特別展示〈第2回〉」を行いました

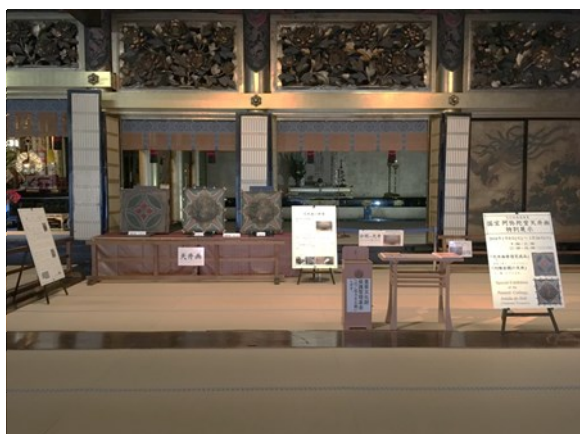
御正忌報恩講法要期間中、平成30年1月9日（火）から16日（火）まで8日間、阿弥陀堂天井画の特別展示を行い、4000人以上の方々にお越し頂きました。



▲ 公開の様子



▲ 阿弥陀堂余間の天井



▲ 阿弥陀堂内特設展示会場

今回は天井画の展示に加え、昨年11月の展示ではご覧いただけなかった、天井画が実際に取り付けられている阿弥陀堂内部の天井も公開しました。（次頁にて特別展示で掲示した説明パネルをご覧くださいませ）

これからも、修復期間中でしか見ることのできないものを中心に、文化財の魅力、奥深さをお伝えしてまいります。



▲ 天井画の展示

天井画の修復

格天井の天井画

阿弥陀堂内陣の天井は木を格子状に組んだ「格天井」という構造で、269 個ある区画すべてに「天井画」が取り付けられています。

この度は、修復のために取り外した天井画を御正忌報恩講法要へご参拝の皆様にご覧いただきます。



内陣余間の格天井

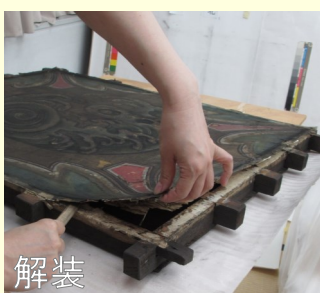
オリジナルを伝えていく

天井画は「本紙：絵の描かれた紙」が「下地：格子状の木枠」に張り付けられた構造をしています。修復の際は本紙と下地に分けて作業を行っていきます(解装)。

下地には、本紙を張りつける際、仕上がりが良くなるように「下張り：和紙を数層に張る工程」を施します。和紙が貴重だった時代、下張りには不要になった「反故紙」を用いていました。

本紙は、絵具の剥落や欠損で傷んだ箇所を丁寧に補修していきますが、絵の欠けた箇所に元の色を加えることはせず、あくまで補修紙をあてた部分が目立たないよう周囲に合わせた色を補います(補彩)。

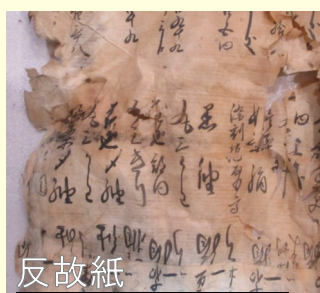
描かれた当初のオリジナリティを尊重し、付け足すことなく、そのままでの絵を次世代に伝えていくのです。



解装



下張り



反故紙

※修復の際に取り外したもの



補彩

修復業者：宇佐美松鶴堂

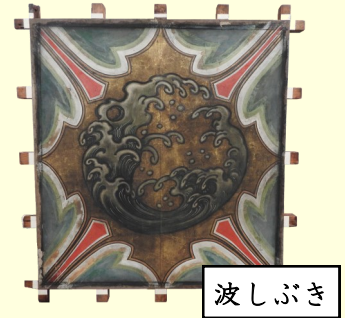
波しぶきと七宝文

波しぶき ～ 迷いの海 と さとりの海 ～

親鸞聖人はご著書の中で「海」という言葉を「衆生(私たち)の世界」と「仏の世界」という全く相反する意味の比喩として用いられます。

「悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し」と、自らの自己中心的な煩惱を深く受け止め、嘆かれる一方で、「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。」と、自身の思いは、すでに仏のはたらきの海の中にあることを慶ばれています。

大自然の中で、海が猛威と穏やかさの二面性を併せ持っているように、荒々しい私の心であっても、すでに仏の心につつまれていることを、ゆっくりと仏前で手を合わせ、見つめてみてはどうでしょうか。



七宝文 ～ 連鎖し広がる文様とご縁 ～

釈尊は「仏説無量寿経」で、浄土を飾る七つの宝石(金、銀、水晶、真珠など)のことを「七宝」と説かれています。

一方で、内陣天井画の文様も「七宝文」といい、周囲の円形を重ね合わせて繋げた文様は「七宝つなぎ」と呼ばれます。文様としての七宝と、経典に説かれる七宝の関係性は定かではありません。もしかすると、昔の人は、円形が無限に繋がっていく文様を、ご縁が広がっていく様子に見立てたのかもしれませんが。

